

患者

さんと



P A T I E N T & S C H O O L N U R S E

保健室の常連・病弱女子「患者さん」

自己肯定感の低い保健医「先生」

先生

創作男女×TL

a . m . / 御膳

患者さんと先生
～ 出会いの幕開け～



患者さん

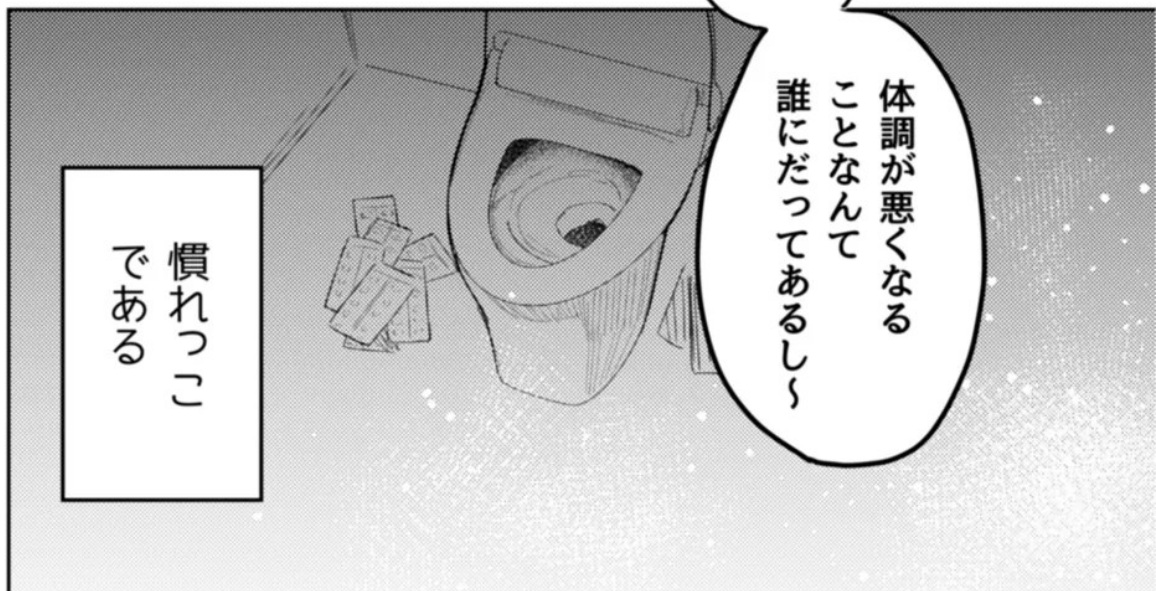
創作男女XTL



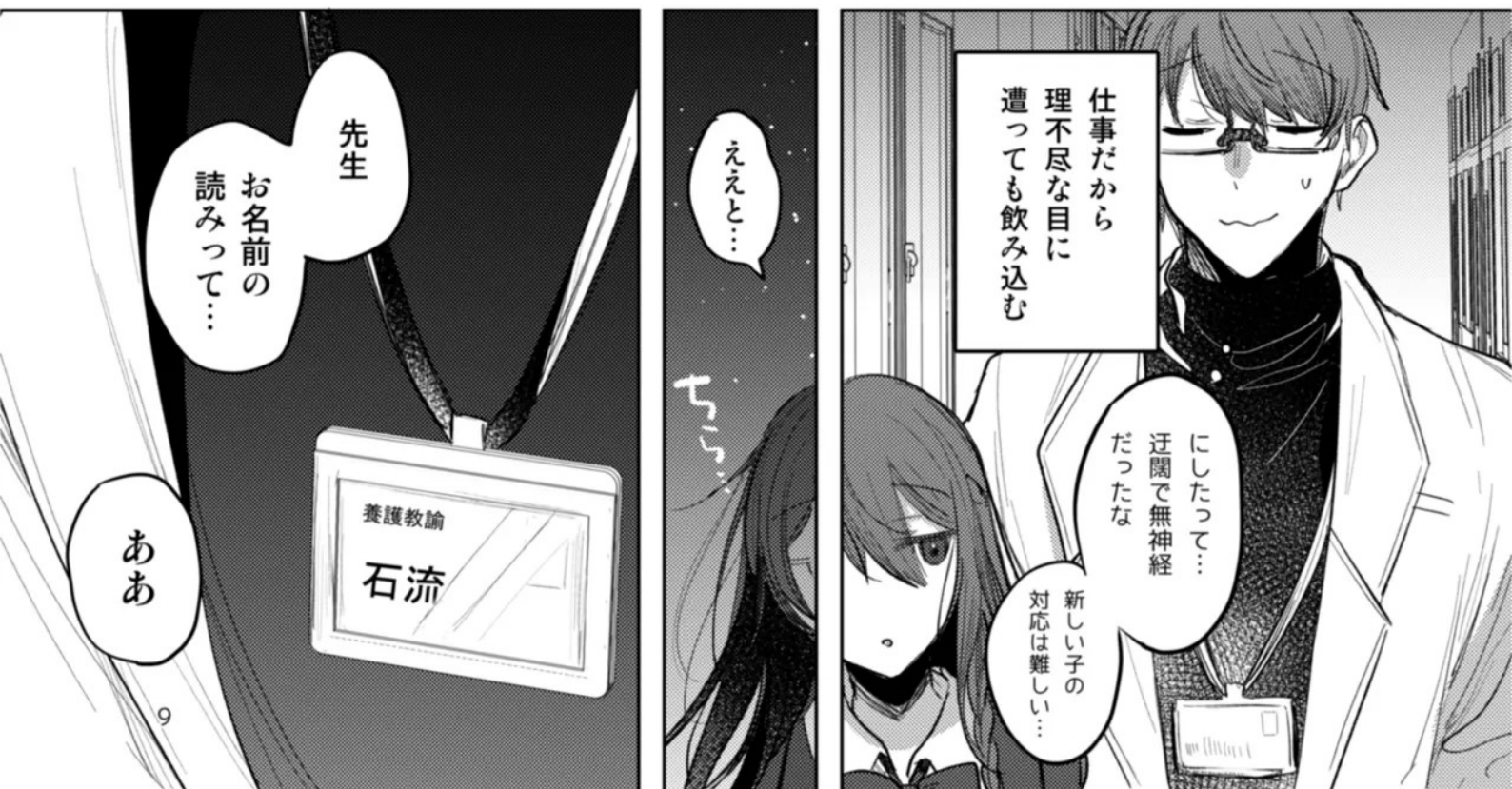












僕は
いしながれ
石流 竹千代

いしながれも
たけちよも
長いし

「先生」で
構わないよ

では…
先生で

どうせ数年だけの
付き合いなの
だから

僕のことを
わざわざ覚える
必要はない

はい

ところで
君の名前は？

わたしは…

さきこい
笹五位
つきこ
月子…です

ふむふむ

さきこい
さん

ササゴイ…
鳥だっけか

ペリカン目サギ科



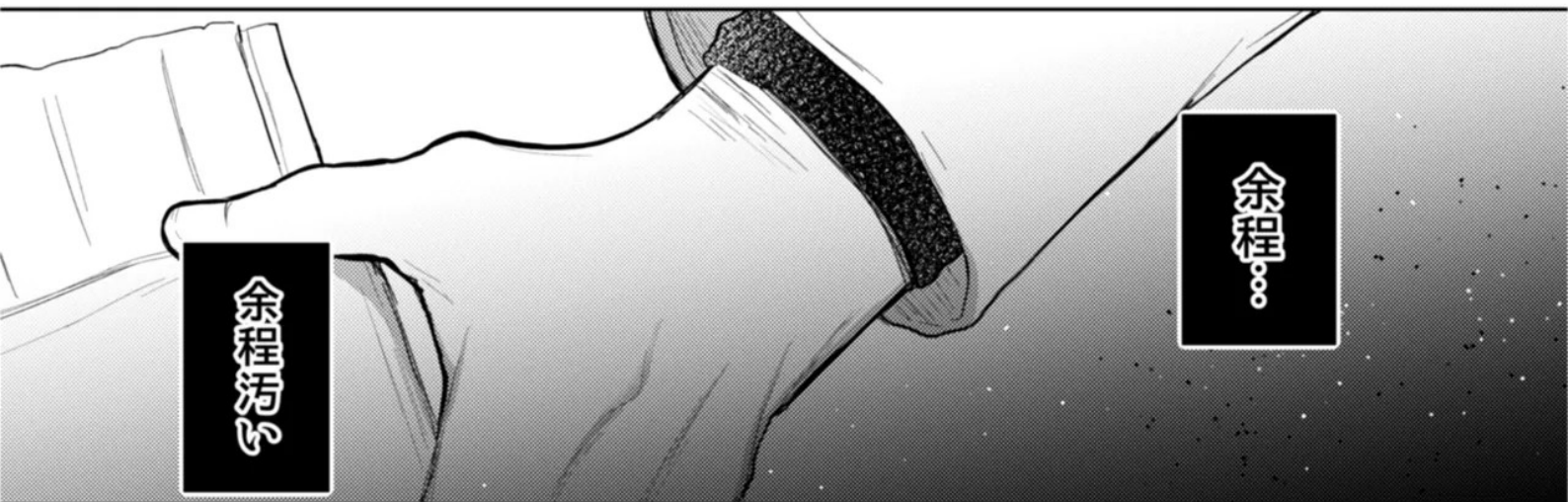
で

患者さん1号との
再会は想定以上
に早かった

石流先生
すみません

またお願い
できますか







なんで…

みんな
みたいに

普通に
できないんだろ…

僕は

まだ
授業中だし

この場所なら
大丈夫だろう

ただただ
どうにかして
あげたかった





ときめきは
ない

おいしくも
ない

慣れた味だ



これは
誰かが辛さを
紛らわせてくれて

泣き止ませて
くれる



君は

存在の証明
でもあった

はっ

汚く
ないよ



私

保健室の先生
というのは

ただ話を聞いて
簡単な手当を
する人…

としか
認識して
いませんでした

ですが

改めなければ
いけませんね

先生





誰かに特別な
好意を向けられて
いることは

向けられている
側には痛い程
分かるものだ

あの

先生…

それが
僕の本質を
捉えず

クラスで好きな子
できなかったの？

僕一応
おじさんだよ？

気持ちは
嬉しいけどさ

当人の
脳内に
しかない

理想的な「僕」を
好いている
ということも

ごめんね

本当の
僕なんて
醜いんだから

知らなくて
いいけどさ



思えば

僕にキスされて
動揺も照れも
していなかった

僕の行動を
客観的に見て

「慰めただけ」と
ちゃんと
判断できていた



この子は

僕に理想像を
押し付け
ないんだな…



制服、シミに
なっちゃうから
洗っちゃおうね

とりあえず
ジャージ
着ておこっか

はい

あつ

カーテン
ちゃんと
閉めないとい!

見え…



え…？

あ…っ

すみません

待って

どうしたの
その傷

10ニッ

…っ

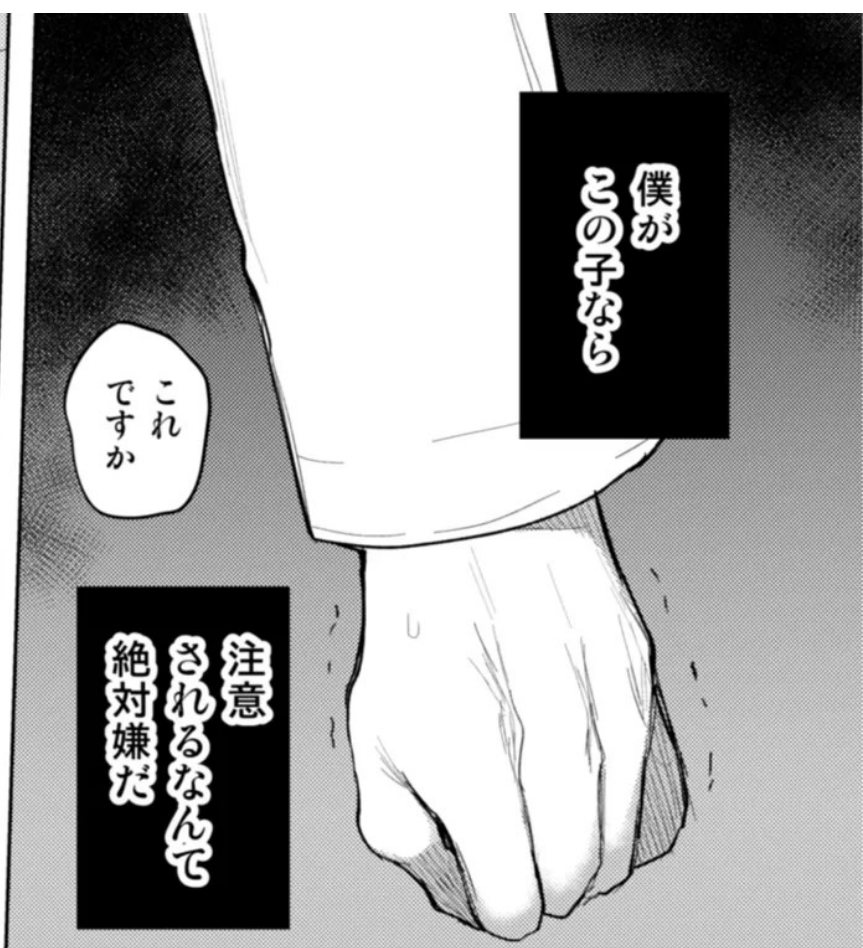
深い傷では
なさそうだ

ごまかされたら
なるべくそっと
しておこう

ドッ

深く突っ込むと
かえって
こじれかねない

何より…





君はそろそろ
素直に

正直に
言えるのか

笹五位さんが
打ち明けて
くれたから

話すん
だけど



…っ

これで
秘密の共有…
ってことで



僕も

君みたいなの
ことをして
るんだよ



だから

私の傷を見ても
引かなかった
んですね



石流先生が
保健室の
先生で…

よかった



「僕が僕で
よかった」



なんて
言われたこと

今まで
一度でも
あったか？

なぜ
自分で自分を
傷つけるんだ？

NOTE

まずは
赤のボールペン

次はカッター

たかだか医者になれなかっただけで

たかだか父親に認められなかっただけじゃないか

普通に生きていたら自傷をするなんて考えもしないだろう

最後はナイフ

汚い傷を増やすな

でも、一番
痛いのは――



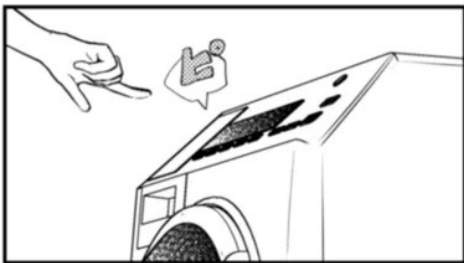




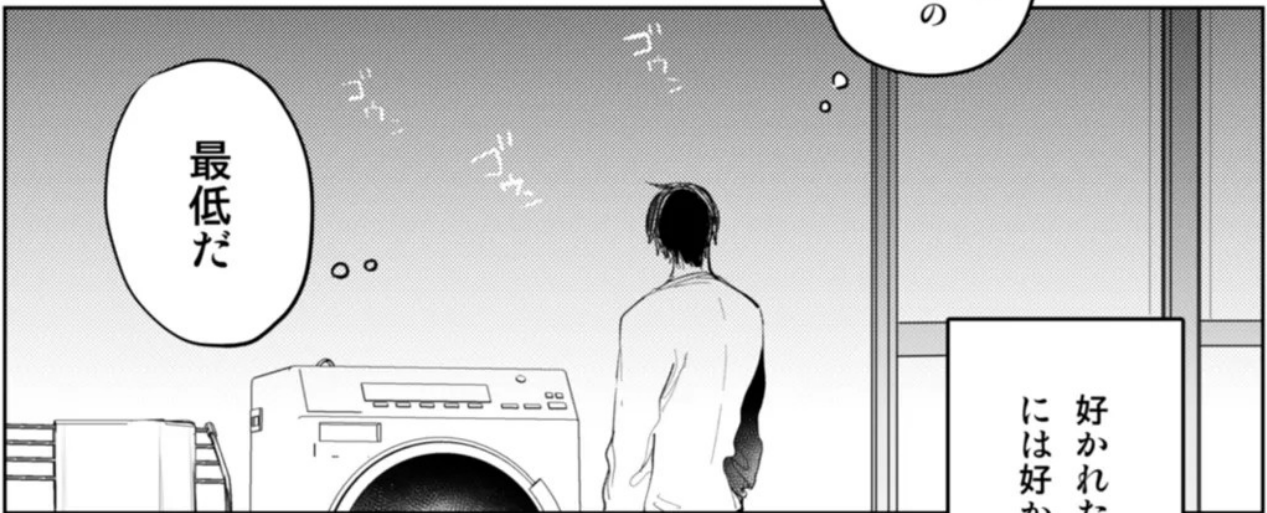


先生は

汚くなんて
ないですよ



守らなければ
いけないはずの
生徒なのに



最低だ

好かれない人
には好かれない

理想像を
押し付けて
いるのは

僕の方
じゃないか

触れたい人には
触れられない



ごめんね

好きな人が
いるから





好かれても
振るのは苦しいよ

ただ、本当に
僕のことを好きか
どうか怪しいけどね…

一時的
気の迷いって
やつだと思う



君は本当に
人のことよく
見てるね



なるほど

だからそんなに
嬉しくなさそう
だったんですね



「人」だから
じゃなくて

「先生」だから
何となく
わかるんですよ



ところで

先生って
好きな人が
いたんですね

正直
意外でした

告白されても
誰とも付き
合わないから

てっきり興味
がないのかと…

先生なら
誰とでも付き
合えそうなのに





いつ
死んだって
いいのだ



どうせいつか
死ぬのだ

それって
どういう…



社会的地位や
信頼を失っても

本当に
手に入れたいものが
眼前にあるのだから

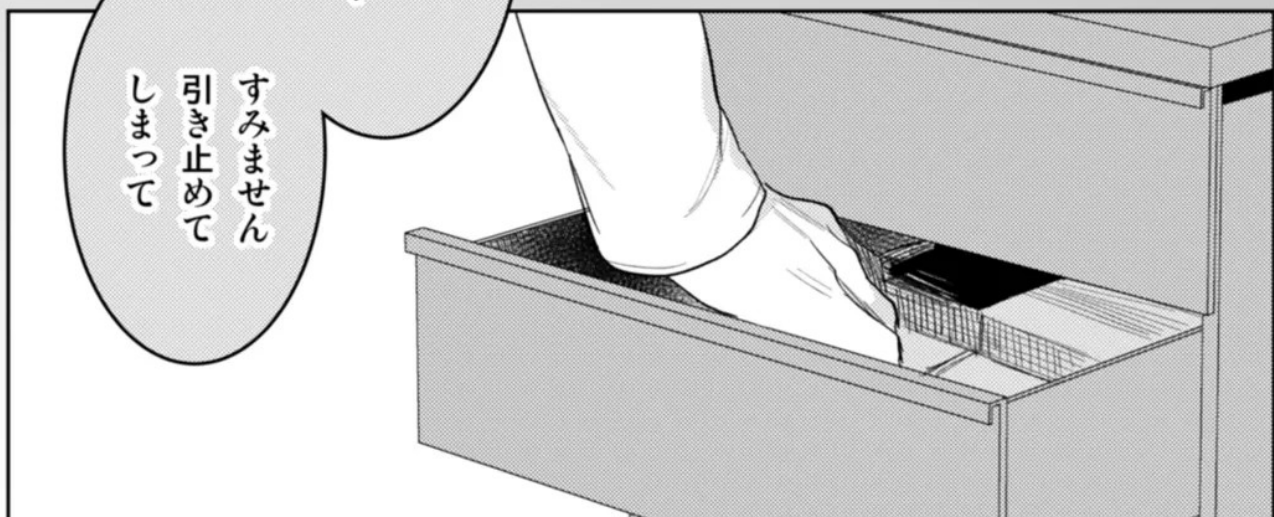
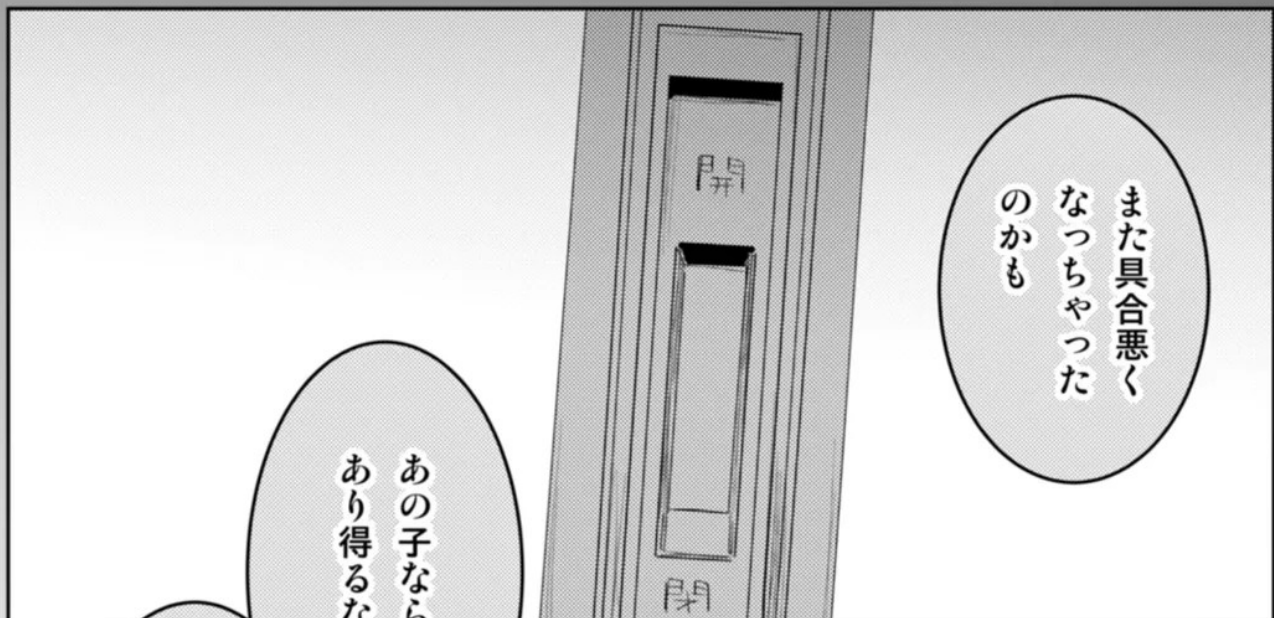
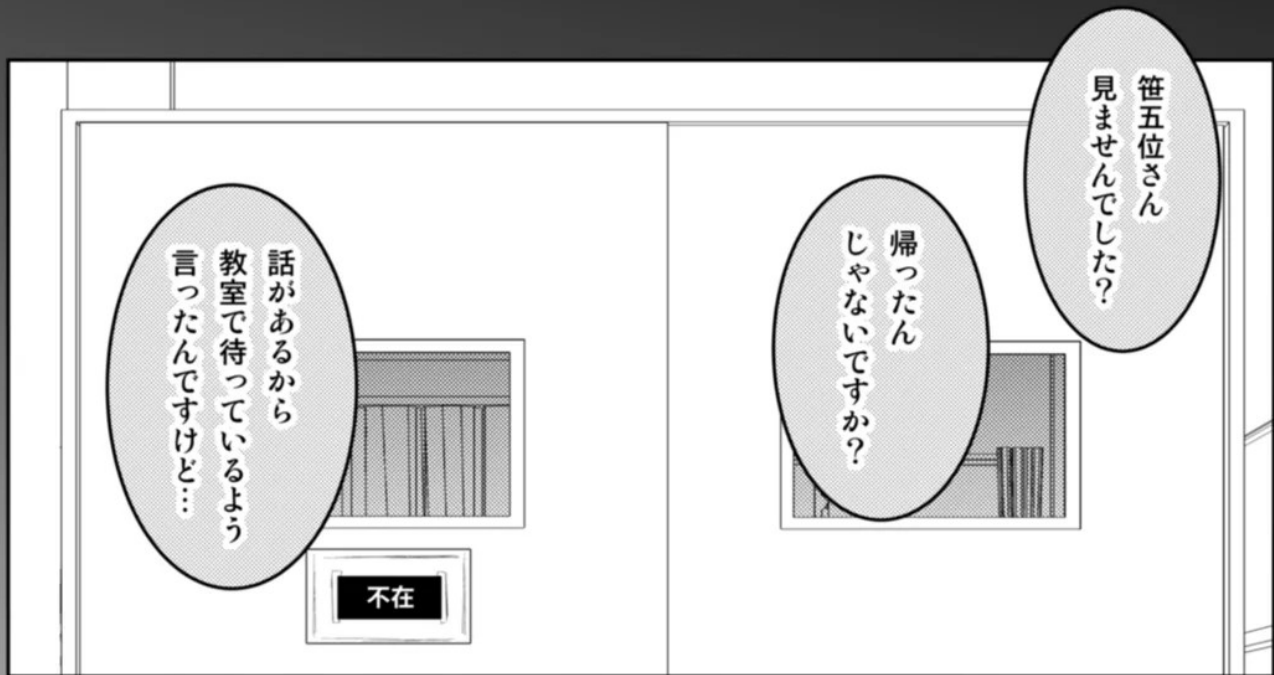


もう全部

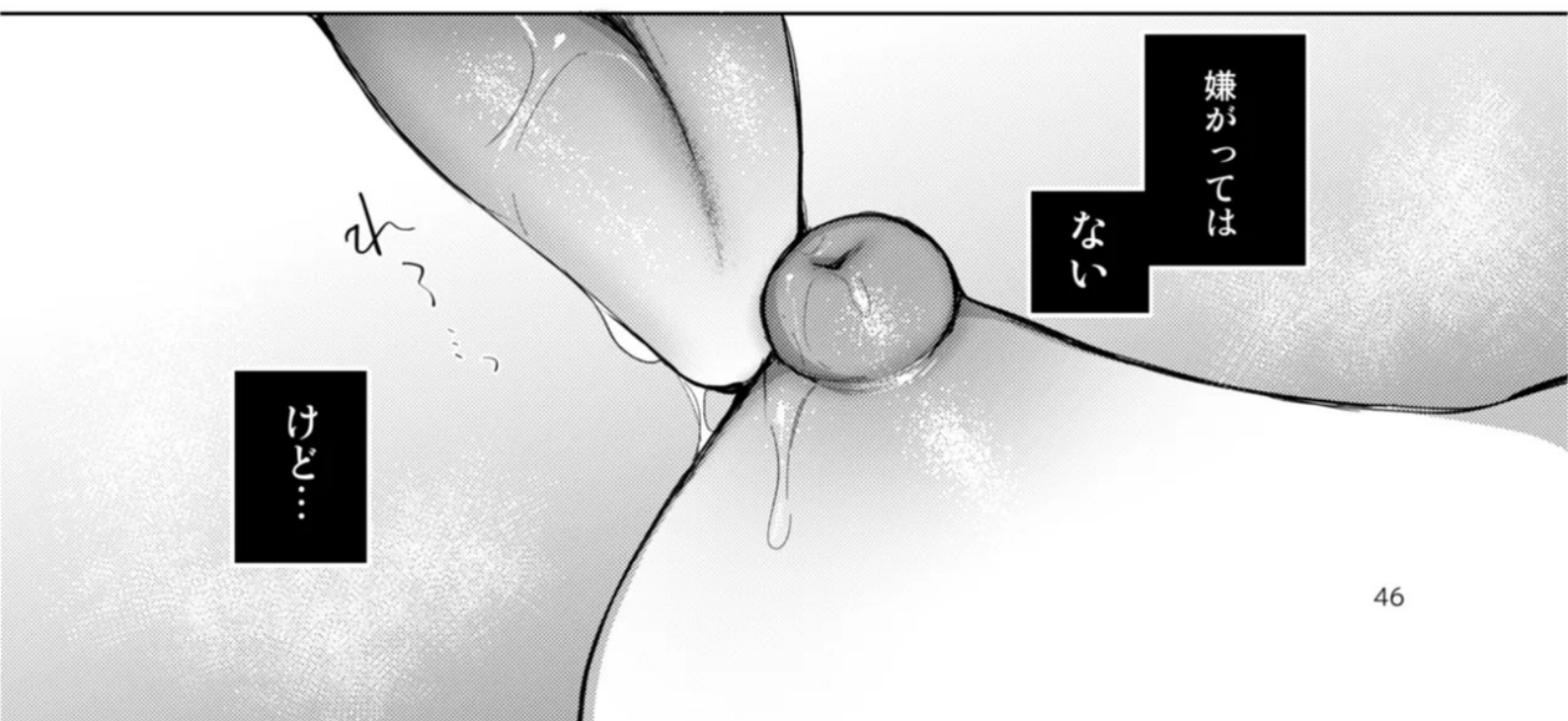
終わりに
したい

どうか誰も 咎めるな

せんせ…？













嫌なら

やめるから

夢と現実の区別も
付かなくなった
僕をどうか

止めて

私

嫌なんか
じゃない…

です

夢…



先生に

私を

求められて

嬉しいん
です…



…ッ

これは
夢なのか？

夢なら

どうか
醒めないまま
でいてくれ

キツ…

そうか
初めてか

血…

ア…





本当の
ところ

先生はなぜ
私を抱いたん
ですか？

生徒の
体目当て…？

先生の好きな人の
穴埋めでも
私は別に…

違う



君が

好き…

だから



なら

うれしい

です...

グッ

びゅん♡

け、
けど...

おん♡

おん♡

おん♡





先生

私達
両思いと
いうことは…

付き合う

ということ
ですか？

え…？

ち

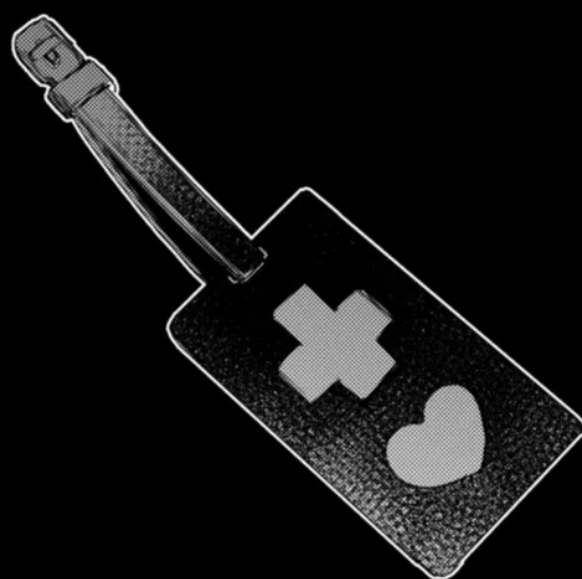
夢はまだ

違うん
ですか？

醒めない
らしい

よ

よろしく
お願いします…?





ちゃんとカバンに
付けてた方が
いいわよ

最近調子良い
みたいだけど

普通の
女の子に
なりたかった

急にダメに
なった時に
困るでしょ



普通の
女の子に
なれなかった

もう
大丈夫だよ



うん

ありがとう
姉さん

あなた
普通より体が
弱いんだから



得意教科は
国語と英語

Notebook

将来の夢は
本作りに
携わること

翻訳家に
なれたら
いいな

大人になって
好きな人ができて
結婚できたら

もっといい

こんな体
だもん…

無理だよ

高望みで
しかない

ごめんね

好きな人が
いるから

先生に
好きな人が
いると知った時

ショック
だったけど
ちよつと安心した

私の手の届く
場所にはいないのだと
分かったから

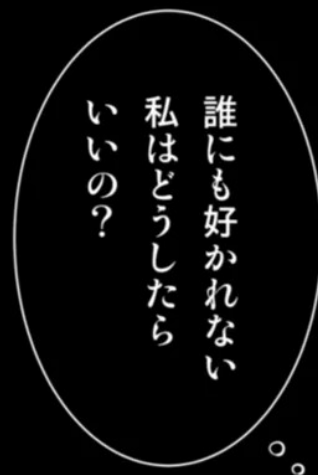
私

先生のこと
好きになつて
たんだな…

少しでも
可能性がある状態の
方が苦しいから

でも
よかった

これも
諦められる





だから

先生に抱かれる
なんて本望だった

それがどんな
理由であつても

こんなの絶対に
間違ってるって
分かるけど…

私のこと

好きじゃ
なくても

……



君が

少しでも
幸せな夢を
見られるのなら

これくらい

好き…

あの瞬間
私は

ゆ…

普通の
女の子に

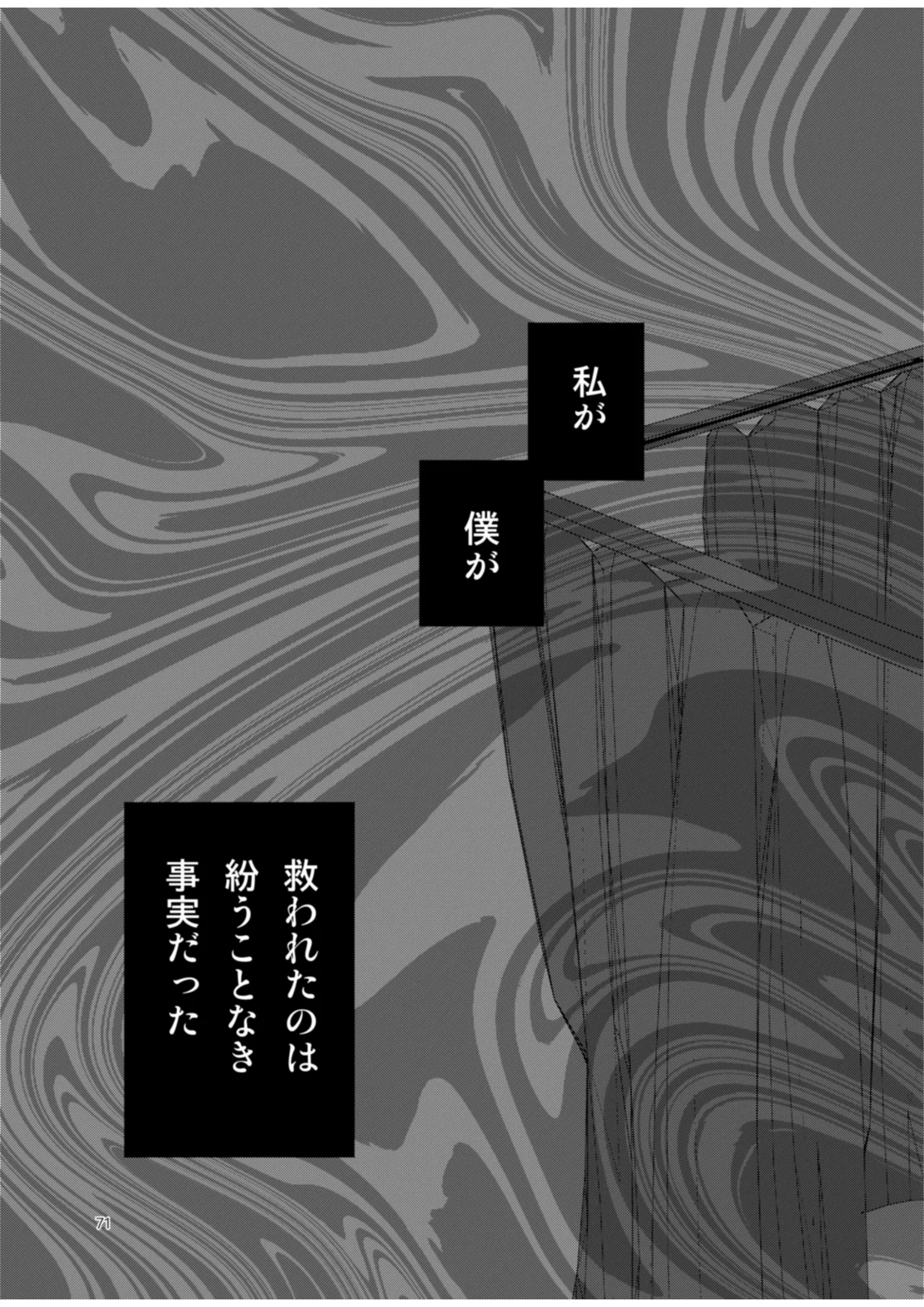
夢でも
見てみたい

なれた
気がした



これが
正しくもなく

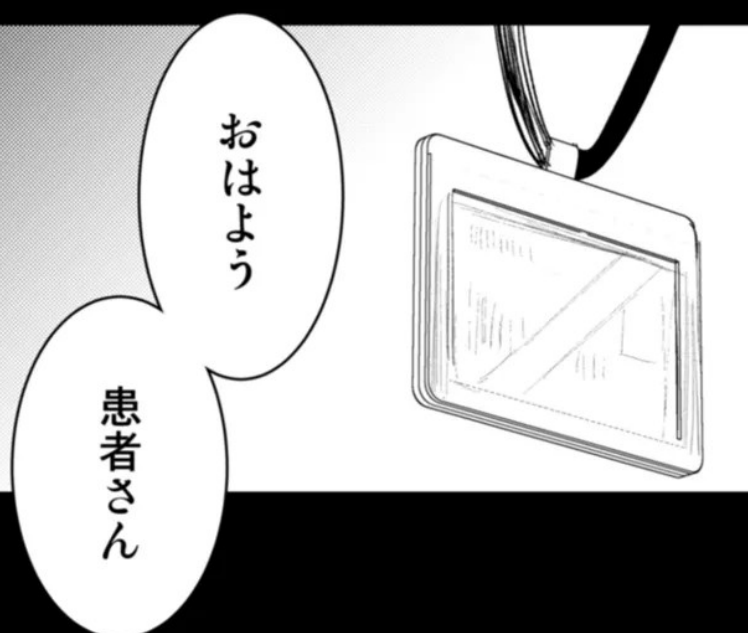
普通でも
なくても

The background of the page features a complex pattern of wavy, concentric lines in various shades of gray, creating a sense of movement and depth. On the right side, there is a faint, hand-drawn sketch of a bridge with multiple arches and vertical supports, extending from the top right towards the center.

私が

僕が

救われたのは
紛うことなき
事実だった



パ
ン

僕はあくまで
保健室の先生という
役割でしかない

油断していると
きつと踏み込み
すぎてしまう

一定の距離を保って
のめり込まない
ように――

できるの
だろうか？



患者さんと先生本3冊目でした。
長くなりすぎた。

時系列は
3冊目(コレ)→1冊目→2冊目(ラブホ編)
です。

次は明るい話描きます、多分…。

発行 a.m.

発行人 御膳

2024年5月 COMITIA148 初版発行

nakahashimizuki@gmail.com

twitter(X) @am_is_gozen(御膳)

pixiv 3896141

患者さんと先生
～ 出会いの幕開け～





2024/05/26 COMITIA148









女子敬乳貧弱病 x 保健医 弱々デレヤンヘン

患者さんと先生

～ 出会いの幕開け～

どうか誰も咎めるな

76P
+ex

R18
adult only

a.m. / 御膳

先生は保健室の常連・病弱女子「患者さん」

自己肯定感の低い保健医「先生」

なんて
言われたこと
ないです

今まで
一度も
なかったか？

「僕が僕で
よかった」

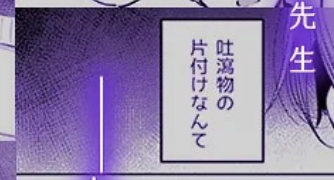
PATIENT & SCHOOL NURSE

入学直後



体調を崩した女生徒を

助けた保健室の先生



強い拒絶



——幼い頃から虚弱で病弱で、
頻繁に病院に通い、時には入院もした。
ずっとそんな調子だったのでなかなか
学校に通えず保健室登校も多かった。

あの瞬間
私は

ゆ……

普通の
女の子に

夢でも
見てみたい

なれた
気がした

登場人物

普通の
女の子に
なりたかった

急にダメに
なった時に
困るでしょ

虚弱で病弱な女学生

普通の
女の子に
なれなかった

あなた
普通より体が
弱いんだから

もう
大丈夫だよ



矢五位 月子

新入生

ささごい

つきこ

保健医

石流先生

登場人物

汚く
いしな
がれ
ないよ

ふは

——僕も、なんでみんなみたいに
普通にできないんだろう。

この
時期は…

毎年
暇だなあ

ヤハ

ヤハ

いしながれ
石流先生！

どうせ数年だけの付き合いなのだから
僕のことをわざわざ覚える必要はない

10

どうせいつか
死ぬのだ

それって
どういふ……

だって
死んだって
いのだ

本当に
手に入れたいものが
眼前にあるのだから

脚
上げて

っせんせ……
くすぐたい

……？

救ったり救われたり、救

われなかったり

る、なぜ自分で自分を
す傷つけるんだ？

普通に生きていたら
自傷をするなんて
考えもしないだろう

汚い傷を
増やすな

これは夢だ

僕が

先生が先生で

よかった

荒唐無稽な
僕の地獄

僕で？

本当の君は
そんな顔をしない

患者さんと先生の歪んだ幕開け。

紙を丸めて

「これはよく使われる例えだけれど」

先生は事務机に放置されていた書き損じの書類を人差し指でつまみ、それをぐしゃぐしゃと両手で丸めた。

「一度心に傷を負うと」

白いコピー用紙は大人の男性の手と握力によって抵抗なく丸く小さい形になった後、またしても抵抗なく広げられた。

「どれだけ治療して、回復して、元の姿に戻そうとしても」一枚のコピー用紙ということに変わりはない。だが、皺くちゃで、綺麗な形ではない、もう使えなくなったそれは……。

「元通りにはならないんだ」

先生は紙をゴミ箱へと捨てる。先生だって最初からそれを捨てるつもりだったはずなのに。どうして私は……。

「君はそれでも、これを選ぶのか？」

暗に示唆しているのだろうか。

「……選ばないとは思いますが」

私は床に置かれたゴミ箱を掴んで先生の前に突き出す。

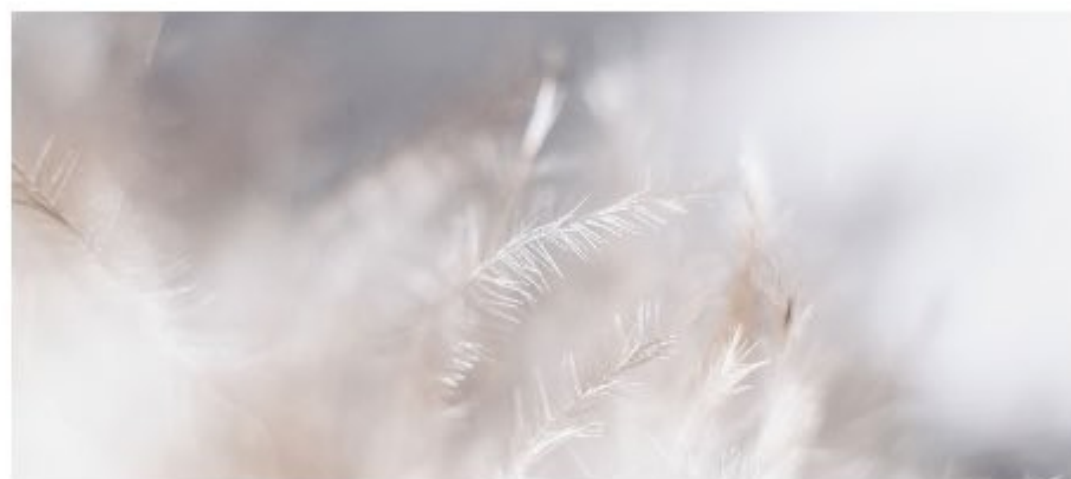
「住めば都、ゴミ箱の中だって楽しいかもしれません。燃える時は他のゴミと一蓮托生ですからきっと寂しくありません。それに、他のゴミだって最初から捨てられるなんて思っても

いなかったでしょうよ」

隙を作らないように立て続けに話す。

「で、先生。またタバコ、吸ってましたね？ 空箱が入りますよ」

「君は強いな……」



白衣

先生が着ていた白衣が事務椅子にかけてあった。何となく触れてみると、まだ温もりが残っていて少しドキツとした。そのまま私は白衣を握りしめ、手に取った。

数分後、先生は保健室に戻ってくるや否や丸い目をしてばかりとこちらを見た。何故ならば、私が先生の白衣を抱きしめるかのように手に取っていて、あまつさえそれを顔にうずめて匂いを嗅いでいたからである。何の言い逃れもできない状況に私は慌てるどころか一周回って落ち着いていた。

「せ、先生の白衣、いい匂いします」

鼻腔いっぱい広がる先生の要素が私を癒していたこともあるのだろう。洗濯洗剤、柔軟剤、タバコの煙、先生が僅かにつけている香水。そして、先生自身の匂い。

「えっ……？」

いくつか長めの間が空いた後、先生は素っ頓狂な声を上げて慌てて私に駆け寄る。

「ちょ、ちよっと待って！ 随分洗濯してない気がする！

汚いよ！」

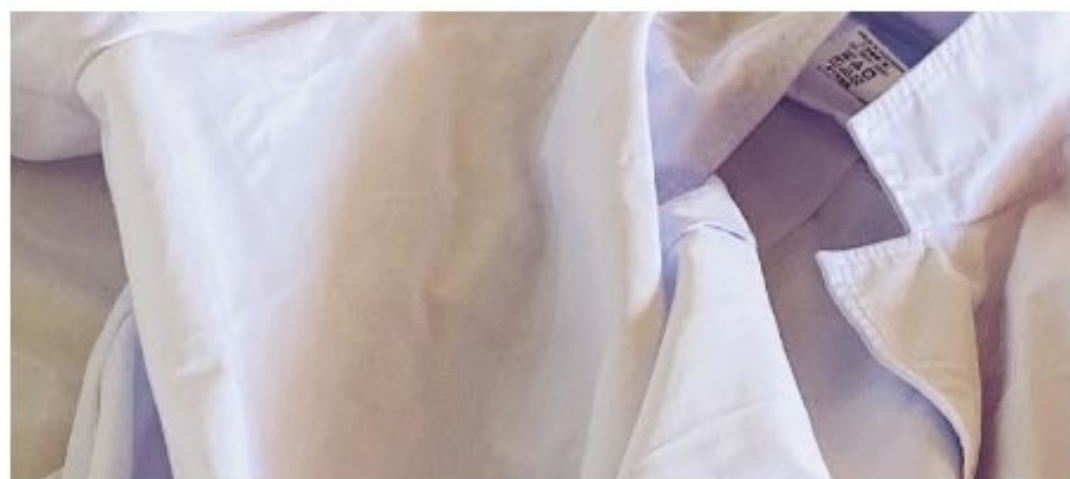
白衣を奪い取ろうとする。が、非力な私が精一杯の力を出して白衣を握りしめる。

「……いい匂いって言うてるじゃないですか。汚くないですよ、多分」

「うえ……？」

本当に信じられないらしい。

「好きです、先生の匂い」





「綺麗……」

「ねー。ここ結構穴場スポットなんだよ」

先生はタバコをぷかぷかと吸いながら目の前の絶景を愛おしそうに眺める。

保健室を出て右手に進み、裏口から出てすぐの場所にある非常用の螺旋階段。普段使われることがないため人気は無く、手入れをされていないのか手すりの塗装がところどころ剥げていて錆びている箇所がちらほら見受けられる。

それに加えて、裏口と旧校舎の境にあるじめつとした日当たりの悪い場所なので「素敵な場所」とはとても言い難い。

しかし、螺旋階段を少し上って何周か円を描き地上から距離を取ると、グラウンドを囲うように植わっている桜を見下ろすことができるのだ。

「ここならタバコ吸っても怒る人いないからさあ」
「もう」

先生はケラケラと笑いながら携帯灰皿にタバコの灰を落とし、視線を真っ直ぐ桜に向けたままゆっくりと口を開く。

「誰も見てないから、キスもし放題だしねえ」

「し、し放題なわけでは、ないですが……」

「それは残念」

桜

【あかい足先】

「先生って変態……ですよ」

私の足裏、かかとを骨張った手で撫で、そのまま足の指を一本ずつふにふにと遊び始めた。何をしているのだろう。先生は目線を下に向けたまま口を開く。

「変態かどうかは置いておいて。まあ男だし、それなりに性欲あるんじゃない？」

その言葉の後には「知らないけど」と続きそうな他人事っぷり。

まつ毛は長いのに喉仏はしっかり主張していて、なんだかチグハグだなと先生の顔を見て思う。先生も「男」なのか。

あかい足先

あぐらをかいて座っている先生の体の中にすっぽりと埋められた私は、なす術もなく体育座りの姿勢になり、「いい？」の一言で呆気なくタイツを脱がされた。そのタイツはというと私の手の届かないところに置かれ、今に至る。暖房は効いているとはいえ少し肌寒いので返してほしい。

「患者さんってばタイツ履いてるのに足冷えちゃってるからさ。こうしてマッサージで血行良くしてるだけだよ？」

(……本当かなあ)

先生に優しく指圧されていく内に足全体が温かくなっていった。気持ちいいし、確かにありがたいけれども……。指先が赤くなったことを確認すると先生は足首、ふくらはぎ、膝周りとマッサージする箇所を徐々に上へと移動させていく。

「やっぱり目的、ありますよね!？」

「ん？ んふふ」

膝頭をくるくると円を描きながら撫でて誤魔化しているつもりなのだろうか。

「今日は触るだけ」

膝頭を撫でた手をそのまま太ももまでスライドさせ、下着が見えないギリギリまでスカートを捲り上げる。小さい悲鳴が口から漏れたが、下着を見られる以上のことをしているのに何を照れているのだろうと自分を俯瞰して落ち着きを取り戻した。

「患者さんが本当に嫌がることはしない」

それは、自分自身に言い聞かせているような口振りだった。宣言通り、太ももより上へ手を移動させなかったが、何だかホッとしたような、物足りないような。両方の太ももを手のひら全体を使って撫でられて気が付いた。先生の手が当たっているところがやけに熱く感じる。やはり血行が良くないのだろうか。それとも、自分がその先を意識してしまっているからなのだろうか。

手は太ももの表側から裏側へゆっくりと周った。そこからお尻に差し掛からないギリギリのゾーンまで触るものだから、思わず膝を寄せて身じろぎしてしまった。

その瞬間、先生は私の体から手を完全に離す。

私は即座に顔を上げ、先生の表情を見た。真顔。なんで？
だが、よく見ると頬は少しだけ赤く染まっている。

「これ以上は僕が我慢できなくなるからおしまい。あったかくなったでしょ？」

（……わ、私が我慢できなくなっちゃったじゃないですか）



